

平成22年度(2010年度)

構造的読解力向上のための 授業づくりに関する研究(国語)

国語科教材において、学年や発達段階に応じた構造的読解力を育成するために、どのような作者の仕掛けがされているのか、文章中の構成、言葉の対比、登場人物の状況や心情の変化に着目し、学習ツールの開発を中心に研究する。

<研究員>

関野 真弓	箕面市立北小学校	田尾 真一	箕面市立とどろみの森学園
重本 佳代子	箕面市立西小学校		止々呂美小学校
酒井 知佐子	箕面市立西南小学校	西川ひとみ	箕面市立とどろみの森学園
上田 敦子	箕面市立萱野東小学校		止々呂美中学校
上野 真美	箕面市立萱野東小学校	松下 達郎	箕面市立第六中学校
上野 詩織	箕面市立萱野東小学校	菊池 史子	箕面市立第六中学校
吉川 喜久子	箕面市立萱野東小学校		
村井 邦匡	箕面市立中小学校		
東 浩子	箕面市立豊川南小学校		
持田 里香	箕面市立豊川南小学校		
前田 尚子	箕面市立萱野北小学校		

<スーパーバイザー>

大阪教育大学 教育学部 国語教育講座 住田 勝 准教授

物語の舞台裏によろこそ

—構造をとらえて……それで？それからどうするの？—

住田勝（大阪教育大学）

● 構造的読解力キャンペーンの2つの“陥穽”

ここ数年、大阪府下のさまざまな国語教育実践について議論する場で、物語や説明的文章を「構造的に」読むことについて主張してきた。実際に現場の先生方と一緒に教材研究に取り組み、学習指導案を練り、授業研究で検証してきた。もちろん、箕面市においては、教育センターにおける取り組みがその中心をにない、これまでに多くの成果を上げてきたと言ってよいだろう。その取り組みを通して、国語教材をどのように教材分析すれば、そのテキストの「構造」のおもしろさを“教師として”とらえることができるのか、そして、更に進んで、そうした“おもしろい構造”と子どもたちをどのように出会わせることができるのか、という構造的読解力を育てるための授業作りの根幹に関わる基礎的研究が、一定程度形として見えてきたと考えることができるだろう。

そこで“陥穽”である。

とある実践現場で、構造的読解力育成について短い講演を行ったときのことである。その学校の授業作りを主導しているあるベテランの先生から、次のような反論をいただいた。

教師の教材の読み取りとして、構造的に読むことについては是非もない。しかし、そうした物語や説明的文章の「作り」や「仕組み」「しかけ」を子どもに考えさせることについては、私は反対です。そんな、物語の「舞台裏」を子どもに見せたくないです。

構造的に読む力について考えるとき、こうした「反論」というか「違和感」を、そのベテランの先生と同様に感じたことがある方は、少なくないのではないだろうか。殊、物語には浸らせたい。素敵で感動的な物語、考えさせる物語……その世界を我がことのように、リアルに、迫真性を以て感じ入らせたい。特に物語の読みの体験はそうだと考えたとき、分析的に読むという営みは、「浸ること」の反対ではないか。浸らない読み。突き放して、対象化して、分析する読み方。物語がどんなふうに関わり立てられ、「仕組まれて」いるのか。それをとらえる力こそが構造的読解力なのだが、それは、私たちが求め手やまない、深く豊かな物語に浸りきる感動体験を徹底的に破壊するのではないか。物語の「舞台裏」に子どもたちを絶対に立たせたくない。そんな無残な体験をさせたくない。

その先生の切実な叫びに、私は自分自身の力不足を改めて認識し、深く反省したのである。その程度でしか、「構造的読解力」の本質を語りえていなかった自分に。これが第

一の「陥穽」。

構造的読解力の提案がミスリードしてしまう可能性について、もう一つの側面がある。それは、本当に、まじめに、物語や説明的文章の構造を、本気で教えてしまう授業が実際存在するし、そうすることが子どもたちの読解力を育てるのだと本気で信じる教師もまた少なからずいるということである。去年のこの報告書に寄せた文章にも同じようなことを書いたかも知れないが、くり返しておきたい。

構造を読んで、それで、どうするつもりなんですか。

この問いかけが意味するのは、物語や説明的文章の構造を分析的にとらえる「スキル」を鍛えることこそが、その国語科授業の目的になってしまうことへの警告である。構造分析のスキルぐらい、小学生に徹底的に“仕込めば”習熟するに違いない。100枚の「卒業論文」も書くだらう。しかし、おそらく、その子は、教え込まれた手順通りに、テキストを分割し、比較することはするけれども、それを自分自身の存在と関わる人生の問題へと結びつけて心ふるわせることはないかも知れない。

これをあえて「分析ゲーム」と名付ける。

私たちが肝に銘じて警戒しなければならない「分析ゲーム」。ゲームはゲームにすぎない。その内側で完結する。分析は、そのことによって、作品の持つ、より深い意味に、分析を行った主体、つまり読者が気がつくための方法であるはずだ。意味を探索し、生成し、吟味する主体。つまり子どもたち一人ひとりの「生」の営みとして、「分析」は“生きて働く”必要があるのである。道具はなにかを生み出すための媒介である。分析という方法＝ツールは、そうしてやることによって初めて見えてくるなにかへの道を開く媒介でなければならないのである。これが第二の“陥穽”。

この2つの“陥穽”は、一見真逆の、相容れない考え方を代表しているかのようである。構造読みを、文学的体験の「敵」として排除する考え。構造分析スキルこそが国語科の教育内容であると盲信すること。しかし、この2つは、ある決定的な誤解に由来する「双子」なのだ。つまり、コインの裏と表。どちらにも同じ問題についての決定的な誤謬をはらんだ考え方なのだ。

● 構造分析をすることによってしか、物語の世界に読み浸ることはできない

たとえば、「世界一美しいぼくの村」という四年生教材は、ラストの一行で、「ぼくの美しい村」が戦争によって破壊されて消滅してしまったことが語られる。衝撃的なラストに、多くの読者がショックを受ける。出来事の連鎖として、物語のストーリーを追っかけていた子どもたちは、一読の後、そのショックをさまざまに言語化し、言い表そうとする。そして、教師によってこの物語から戦争の残酷さや、そうした戦争への怒りを持つよう促され、事実そのような初発の感想文が生み出され、この物語は受容されていく。

それは間違いではない。この物語のパワーは、そうした読書反応を次々と引き起こし

ていく可能性を持っているだろう。しかしそうした「ショック」や、「戦争に対する怒り」を、読者である子どもたちに感じせしめたもの。子どもたち自身が、そのように「読まれたもの」と向き合い、その「仕掛け」に立ち向かっていくことは、多くの授業では充分になされていない「未開拓」領域と言ってよい。先のベテラン先生のことばを借りれば、子どもたちを「世界一美しいぼくの村」の“舞台裏”に誘い入れる授業である。この物語は、その題名が「世界一美しいぼくの村」とあり、“村”が主人公である。これは最後の一文を見るまで、その“村”で着地する題名の持つ意味について深く考える読者は少ないかも知れない。しかし、このラストと、題名は、見事な「首尾照応関係」を結んでいる。ラストをタイトルと結びつけて分析することによって、この物語が、世界一美しいパグマンという、ヤモのアイデンティティとしての“村”がヤモによって発見されるドラマであることが見えてくる。そして、それが戦争によって無残に破壊され消滅することによって、その美しさは際立つのである。つまり、“首尾照応”、冒頭と結末を比較分析するという分析の方法は、そうした深い意味の世界を生成するのである。

また、この物語では、冒頭のアフガニスタンの紹介にはじまり、パグマン、ヤモといった詳細な舞台設定につながる部分において、明確に作り込まれた“光”と“影”の対比構造が重要である。すなわち、アフガニスタンやパグマンのすばらしさ、美しさを描き出す“光”のエリアと、そこに忍び寄る“影”、すなわち戦争の落とす影が語られるエリアが、交互に響き合いながら、すべての場面が構成されているのである。このような二項対立する“光と影”という観点からの分析を思いつくことで、この物語の解釈はもう一段深くなるだろう。実際に今年度参観した東大阪のとある研究授業では、ラストの一文の吟味をする授業の中で、これまでの各場面に出てきた“光”と“影”の対比構造を引き合いに出しながら、このラストの一文が、ヤモがパグマンに戻ってきてつぶやく「パグマンはいいな、世界一美しいぼくの村」というタイトルコールと対を為す、最後の“影”であると意味づけていった。さらには、このラストは、これまで描かれた全部の“光”を消し去る、最も大きな“影”だという深い意見も生み出され、充実した意味づけが行われた授業であった。

ここに引き合いに出した教材分析や授業の例は、上記の二つの立場のどちらでもない。子どもたちは、作品に深く感動し、さまざまな主体的な解釈を行っている。同時に、作品の仕組みや仕掛け、つまり「舞台裏」にたってさまざまな分析を行っている。つまり、最初に問題提起した構造的読解力を育てる授業をめぐる、二つの立場がそれぞれ大事にしていることを両方とも備えているのである。現時点で私が提案できることはこのような授業である。

言い換えると、分析をしなければ、感動はできないということ。感動体験のないところに、切れ味のよい意味のある分析は生まれえないということ。感動自体は教えられない。感動するのは子どもたち自身であり、何にどのように感動するかは、読み手それぞれの

内的体験だからである。つまり、子どもたちの心そのものには、教師は触れないのだ。私たちができるのは、子どもたちの心にはたらきかける「ことばの仕組みや仕掛け」に気づかせることである。それを意味づける主体性はあくまで子どもたちの側にある。しかし、子どもたちの心に働きかけているであろう、物語や説明的文章の構造との出会い、対処の仕方、分析の方法については、教師によって導かれ、教えられなければ、“すべての”子どもたちが使いこなせる方法にはなり得ない。先のベテラン先生ならこう言うかも知れない。“子どもをそんな舞台裏に連れて行くべきではない”本当にそうだろうか。教師がはたらきかけるまでもなく、ある学力水準の子どもたちは、勝手に“舞台裏”を意識して解釈を行っている。分析の方法なんて教えてもらわなくても、“つかみ”“オチ”“フラグ”“ヤマ”……こんなメタ言語を駆使しながら、子どもたちはゲームや漫画やテレビを楽しんでいる。つまり、そのような子どもたちにとって、舞台裏を意識しながら読むなんてことは当たり前であり、その楽しさが、いかに豊かなものか、心の底から分かっている子どもたちなのである。

むしろ問題は、そうした“舞台裏”に立つことができずにいる子どもたちなのではないか。物語の出来事を追っかけることはできるが、人物設定を比較しながら読むことが苦手な子ども、場面と場面を比べながら読むことで、くり返されたり対比されている要素を発見するのが難しい子ども。そんな子に「ヤモはどんな気持ちだろう」と聞いたとき、「わしはヤモじゃないからヤモの気持ち分からん」と答えられたら、どう対処するのか。教師としては、これは考えておきたい問題である。物語に出てくる人物は、物語の中で、必要範囲できちんと設定されているはずである。それを意識することができていない読み手は、その人物の心情へはけっして近寄れないのだ。教師は誤解する。既に舞台裏にほっといても立ててしまう子どもたちが何人か見事にヤモの気持ちを言ってしまうと、全員がそれができるのだと。どうしたら他人の気持ちをそんなにすらすら言えるのか、まったく分からないまま放置されている子どもたちが教室にいるのではないか。

● おわりに

構造的に読む力は、すべての子どもにできるだけ早い段階で保証しなければならない力だと考える。なぜなら、それがなければ、物語や説明文の世界に豊かに浸ることができないからである。逆に、そうした浸りきる豊かな体験を目指す文脈でしか、本物の分析は動かないのだ。分析によって豊かな解釈が生み出される具体的な国語教育実践を、一つでも二つでも現実の国語教室に生み出す実践的営みが、今求められている。来年度に向けて、その可能性を探っていきたいと思う。

はじめに

昨年度は物語教材について、構造的読解力育成のために文中の場面の組み立て方や言葉に拘って研究を深めてきた。

今年度は学習ツールを中心に、作者のねらい「しかけ」を探る研究を進めてきた。

作品の構成とともに、言葉や場面の変化や対比性に着目し、それが及ぼす登場人物の心情や状況の変化について、全体を構造的読解の観点から教材研究し、授業実践力を高めることを目的とする。

I 研究テーマ

構造的読解力育成のための授業づくりに向けての学習ツールの研究

II 研究の方法

本研究員は毎年、希望者を募集して組織している。昨年度は物語文について取組んだ。

今年度は、学習ツールについて、構造的読解力育成のための授業づくりを研究した。作品は、小学校1年生から中学校3年生までの9年間を見通したものを選んだ。

小学校6年間、中学校3年間の教材配列は、構造的読解力育成のための繋がりをもった作品ともいえる。授業者は当該学年の教材研究は勿論のこと、各学年のねらいを把握し、この教材でつけたい力をおさえた上で、授業に向けての準備や資料活用が望まれる。

そこで、小学校から中学校までの研究員を構成し、大阪教育大学 住田 勝 准教授を講師にお迎えし、研究員相互での教材研究に取組んだ。

さらに、授業研究の場を設定し、実践的な取組みの中で、研究してきたことの検証を重ね、児童・生徒が国語の学習に関心を持ち、意欲をもって参加できる。授業展開を研究した。

Ⅲ 研究内容

回	期日	時間	備考
第1回	5月11日(火)	16:00 ～ 17:15	講話「平成22年度の取組みと今後の研究の方向性」 小1「ずうっと、ずっと、大好きだよ」 中1「少年の日の思い出」
第2回	6月 1日(火)	16:00 ～ 17:15	小4「世界一美しいぼくの村」(ビデオ授業) 教材を選定し、学習ツールの研究 小3「きつつきの商売」
第3回	7月 6日(火)	16:00 ～ 17:15	教材を選定し、学習ツールの研究 小2「ビーバーの大工事」、「たんぼぼ」、 「すなはまに 上がったアカウミガメ」
第4回	8月20日(金)	午前中	授業力アップ講座と共催 小5、小6「マザー・テレサ」 (市教研国語部会・市内教職員に呼びかけ)
第5回	9月 7日(火)	16:00 ～ 17:15	教材を選定し、学習ツールの研究 小5「わらぐつの中の神様」
第6回	10月 5日(火)	16:00 ～ 17:00	教材を選定し、学習ツールの研究 小5「注文の多い料理店」
第7回	11月 2日(火)	16:00 ～ 17:00	教材を選定し、学習ツールの研究 小2「スーホーの白い馬」「スイミー」「お手紙」
第8回	12月 7日(火)	16:00 ～ 17:00	教材を選定し、学習ツールの研究 小1「はなのみち」(ビデオ授業)
第9回	1月 6日(木)	14:00 ～ 16:00	事前研究協議 「注文の多い料理店」
第10回	2月 1日(火)	16:00 ～ 17:00	授業研究 研究協議 「注文の多い料理店」

IV研究の結果

1 「ずうっと、ずっと、大すきだよ」と「少年の日の思い出」

①今年度の取組と研究の方向性

- ・学習ツール（ワークシート等）を開発し、授業研究を設定していく。
- ・ワークシートを分析しながら、各部員のワークシートづくりをイメージする。

②小1「ずうっと、ずっと、大すきだよ」（光村図書）と中1「少年の日の思い出」（光村図書）で共通するもの

- ・過去の回想作品
- ・文末表現
- ・対比させる表現（低学年から始まっている）
- ・複線が多く含まれている

2 ワークシートの研究

①昨年度酒井教諭の小4教材「世界一美しいぼくの村」授業（ビデオ）を見て、ワークシートを分析しながら、各部員のワークシートづくりをイメージする。

- ・複線をさがす
- ・起承転結をおさえる
- ・グループで考えを共有する
- ・事前学習とふりかえり

②萱野東小学校上野教諭、吉川教諭の小3「きつつきの商売」（光村図書）の学習ワークシート案の分析

- ・音がテーマ（短音とオーケストラの美しさ）
- ・一場面と二場面を対比させる
- ・一人学習と仲間で深められるもの
- ・どの言葉に注目させることができるか

3 「ビーバーの大工事」

①小2教材「ビーバーの大工事」（東京書籍）の学習ツールを分析、授業づくりをイメージする。

- ・各部員のワークシートを分析
- ・順序をとらえさせる「大工事の工程」
- ・オノマトペや比喩表現に着目させる。
- ・写真の提示の仕方のしかた（写真を使った構成）

②「ビーバーの大工事」の教材分析

- ・段落ごとのオノマトペの対比
- ・工程→詳細→詳細の繰り返し（のりしろ表現）

状況の説明と根拠のセットをつくる

- ・後半部の展開
- ・1学期教材「たんぼぼ」、大阪書籍「すなはまに上がったアカウミガメ」も同じ構成になっている。

・高学年、中学生なら、全体像をつかむことはできるが、「ビーバー～」では、可能か？無理なら、どの学年から可能か？

4 「マザー・テレサ」

①教職員研修「授業力アップ講座」と共催し、夏季に実施。「マザー・テレサ／真鍋 和子」東京書籍5年と「愛を運ぶ人 マザー＝テレサ／千葉 茂樹」をワークショップ方式で教材分析。

②受講者感想等より

- ・2つの教材を、こんなに多くの先生たちとじっくり読み深めたことは、初めてだったので、捉え方も目のつけどころも個々によって違ってとてもおもしろいと思いました。
- ・ワーク形式で勉強になった。こういう体験を子どもたちにさせたい。
- ・研究の視点がきまっていて、みんなで話し合うことでたくさん大切なポイントがわかってよかった。
- ・たくさんのベテランの方と一緒にワークができて、大変勉強になりました。題材もおもしろかったです。
- ・構造的に読むことの意義について改めて理解することができてよかったです。ありがとうございました。
- ・同じ伝記2つを読み比べ、検討するというのは、初めての試みであった。
- ・「構造的に読む」ということについてのお話を聞いていて、作者の選んでいるエピソードについての考察など、ていねいに考えて読むことについて考えさせてもらいました。
- ・筆者によって表現の手法は違うが、入れたい要素はどちらも同じというのがよくわかった。
- ・自分の読みと他の先生方の読み、どちらも比べられてよかった。読み比べることが新鮮でした。筆者の意図、書き方の違いで印象も違うことがわかった。
- ・比べ読みをすることによって、筆者の考えが明確になることがよくわかりました。ぜひ、やってみたいです。
- ・過去に教えた教材でしたが、自分の研究不足もあり、子どもたちに面白さを伝えられずに終わっていたなあと反省させられました。
- ・筆者が書かれたものを、しっかり子どもが読むこと。そのことで子ども自身も友だちとしっかりと付き合うことができる。とても印象的でした。
- ・教科書の比べ読み、面白かったです。「書き手と対話する」ことを実感しました。
- ・書き手も読み手も、様々な切り取り方があるということが、改めてわかりました。
- ・構造的に読むということについて、論理的に教えて頂ける講義かと思い参加しました。（経験が浅く、知らないことが多いので…）が、今日の研修も大変楽しく良かったです。

5 「わらぐつの中の神様」

「わらぐつの中の神様」（5年光村図書）の教材分析

- ・タイトル、冒頭部に書かれていることから、どんなことがしかけにあるか考える
- ・「ずっとずっとだいすきだよ」、「スーホーの白い馬」、「ごんぎつね」等と同じ「額縁構造」の作品
- ・物語の節目に「雪」がキーワードになっている
- ・設定を読む 「時、場所、人物」
- ・物語に結末を創作する
- ・創作という表現方法を使って、作品を分析的に読む

6 「注文の多い料理店」

「注文の多い料理店」(5年東京書籍)の教材分析

- ・冒頭部の表現「二人のわかいしんし」なぜ、二人か？宮沢賢治の人物設定の巧みさ。
- ・「額縁構造」を読み取る。
- ・「もしも、犬が入って来なかったら」を考える。
- ・物語の終末を考える。

7 2年生の3部作

次年度、2年生の3部作「スーホーの白い馬」「スイミー」「お手紙」を系統立てて読む

- ・1学期半ば「スイミー」：人物の設定を読む。
- ・2学期「お手紙」：題名読み。二人の関係をおさえる。
- ・3学期「スーホーの白い馬」：額縁構造。人物描写も、場面も重要。

8 「はなのみち」

酒井教諭の小1教材「はなのみち」授業(ビデオ)を見て、協議

- ・絵を見て、内容を考える授業。1年生から「主語」という言葉の使用。文末を意識する。吹き出しも使っていた。→1年生から、文の頭、体や文末も意識している。文というものを常に意識させていきたい。吹き出しと事実。敬体と常体。1年生はまず、文の順序を押さえる。
- ・1年生でもグループの学び合いによく取り組んでいる。→1年生の課題。一人読み、グループ読み。どこまでグループが成立するか。自己主張の強い子たちを、話し合いの中でどうやって折り合いをつけるか。
- ・順序を押さえる手だては、冒頭の文。ストーリーをつくる。本文と比較する。もりだくさんの授業。→ねらいが明確でなかった。絵が違くと内容も違ってくる。1年生は絵から見つける。絵から読み取る力をこれから大事にしていきたい。
- ・絵を楽しんで物語を考える活動がよかった。
- ・ピクチャーブックは絵と文の複合芸術。1年生で順序見つけるのは難しい。4人グループも難しい。ペア学習であろう。絵は2枚の比較ならできる。類比的、対比的構造を読み取る。常に比べて考える。「比べて発見すること」を意識する。文も全部伏せるのは、難しい。例えば、台詞を考える等。スキーマ(心理的描写)。与えるところ、考えるところを明確に。新しい教材開発になった。文の構造を考える上で、1年生から述語を中心に意識していく。述語から「何が?」「なにを?」「いつ?」「どこで?」等。
- ・1年生のできること、できないことを見極める。文の構造を考える上で「いろいろなふね」でも、「はじめ-中-おわり」を「おさかなメモ」で意識する。→「おとうとねずみチロ」で、子どもが「中、外、中、外」と構造を読み取っていた。そんなところから、繰り返しリズム構造を発見できている。

9 「注文の多い料理店」の授業研究(事前研究)

関野教諭の小5教材「注文の多い料理店」授業研究協議、指導案、ワークシート検討

- ・指導案とワークシートの説明。
- ・扉に書かれた13の言葉の順序を子どもたちが考える。読む前にするか、読んでからにするか。類推あるいは記憶か。教科書とのずれを感じながら読む。

- ・導入の題名読みは、するべき。
- ・冒頭と結末だけを読み、人物像を考える。→イメージの重なり、響き合いから物語全体を捉える。
- ・本文に入る時の子どもの構えが大切。読む前に、筆者の立場に立たせてから読む。
- ・（子どもたちの主体的な活動の中で）扉の分析。並べ替え。扉の表と裏の色を変える。
- ・扉の順序生、特徴について、読み解く活動。
- ・6枚目の扉の裏を本時にするか。

10 「注文の多い料理店」の授業研究

○関野教諭の小5教材「注文の多い料理店」授業研究協議

- ・授業（ビデオ）を観察
- ・授業者のふり返り（関野教諭）

本時展開で抜けていたところ。6枚目の扉の裏の言葉から、紳士が今までと違う反応をしていることに気づかせて、今回はどう違うのか、どの言葉から分かるのか、書き込みをしながら、対比をさせながら、進めたかった。「今度という今度」という表現で今までとは違うことを押さえたかった。二人の（紳士の）関係を読みとる。今までは、どちらかが不安を打ち消す役目をしていたが、今回は二人とも不安になっていることを、拾いきれなかった。今までとは違うことと、なぜ違うのかを押さえてから、読みとるところを、先に子どもの気づいたことを書かせてしまった。今までと違うことで「塩っぱ」「塩でもむ。」ことも出ていた。ここで「注文」というキーワードの意味がようやく分かる。それにあまり触れられなかった。また、子どもたちの気づきを「早い」に価値をおいて評価してしまったことで、「遅く」に書いた子が消してしまった。教師の持って行きたいところに、無理矢理持っていたことに反省している。紳士が気づいた場面と自分たち（読み手）が気づいた場面のずれがあることを押さえた方がよかった。なぜ作者は、ずらせたのだろうと考えたかった。質問を「みんなが早く気づいたら、どんな読みができる？」に変えた。紳士のやりとりや滑稽さを気づかせたかった。学力的にしんどい子もひっかかって、分かってくれたことがよかった。最後の発問を、分からない子にも分かるものとは。どういう言葉に注目させたらよかったか。

- ・授業参観者の意見

教室の掲示等、二人の紳士像を丁寧に読みとらせている。紳士のことについて、赤い文字で書かれている。冒頭の部分の服装や会話、扉の場面、二人の関係などからも、たくさんの紳士像を深めて読みとらせている。5年生で、「人物像」という言葉を共有できる教室。指導者が普段から、人物像に焦点を当ててきたからこそ。「なぜ、ずれさせたのか。」について読みと取れていたことから、子どもたちが離れて読めていることがよくわかった。「みんなはどこで気がついた？」の言葉で、教室が活気づいた。タイミングがよかった。

→初発の感想は、「紳士がかわいそう。」が多かった。「ばちが当たった。」という感想もあったが、紳士に同情する読みをする子が多かった。普段なら、題名読みでイメージをふくらませるが、今回は、冒頭と結末だけ読ませて、感想を書かせた。結果、あまり膨らまなかった。題名とつなげていけばよかった。冒頭と結末から、イメージを膨らませたかった。1枚目の扉は、全体で読み取りをした。その後グループごとに分担して、その扉の意味や働きなどを観点とし発表をした。観点は、①扉の位置の意味や働き②扉の特徴、色や文字の色③扉の近くにあるもの④その他。3枚目「鉄砲とたまをここに置いて下さい。」のグループの④その他で、「また変なことが書いてありました。」を書いていたり、ふりかえりで「注文はずいぶん多いでしょうが、」や、最初は「どなたも…」なのに「ことに…」としぼっている点等に気づいていた。

文をバラバラにして、並び直しを行った。間違ったり、悩む中「では、なぜそんな順番なのだろう。」という疑問が、扉の分析で出た。実際に紳士像を押さえる時に、子どもの意見で押さえることできた。扉についての興味は、示すことができた。一読はしており、記憶に頼ろうとして、こんがらがった。

作者の工夫として、登場人物と読み手のずれを考えさせた点は、すごく面白いと思った。初めの方でわかった子どもたちの理由づけの言葉を確認しておきたい。真ん中辺りで、わかった子は、どの辺りの扉のことをいったのか。読者としては、「太った」という表現で「あれ？」となると思うが、直接「だまされた」と結びつけるには、難しいのではないか。読者に「あれ」っと思わせて。だんだんとだまされていることに気づきだす、真ん中辺りの子の意見を確認したい。読者の心を揺れ動かすこともしている。真ん中辺りの子は、揺れ動いたはずである。→早く気づいた子に「早いね。」と言ってしまった。「扉に文句が書かれていること自体がおかしい。」、「『くつをお取り下さい。』自体おかしい。」等。グラデーションの様に、段々わかってくる。おかしさをつないでいく。

「風がどっとふいてきて。」等の表現に気づけなかったのは意外だった。→言葉に意識を集中させてしまった。言葉以外の表現もよかったが、言葉に焦点化しすぎたため、周りの表現にあまり気づけなかった。

最後の4点分かるところを挙げさせるのは、どきどきさせる質問ではないか。→初発の感想は、作品と同化していたが、読んでいくうちにおかしいところに気づきだした。

子どもが、分かっておくべき表現の工夫は、どの辺りまでのことが意見として出たのか。段階的に積み上げたことになるのか。→潜在的には自覚しているだろうが、国語の授業の中で、言葉で、お話を楽しませる工夫を言葉にしていく場が生まれた。作りの手の立場に子どもたちを立たせたい。お話を楽しませてくれるために、いろ

いろな発見をする。具体的に言える、言えない子の差はある。言えない子の出発点にはなっているだろう。言える子は、具体的に作者が工夫しているところを出させる。

挿絵も良い。P72に山猫軒の全景がある。気づく子は気づくだろう。P79の扉の柄の形。P74「WILDCAT」と書いている。

子どもの反応が、「どこで紳士たちは気づいたのだろうか。」と中心発問が鮮明なので、とても分かりやすい授業だった。「注文」で気づくと思っていたが、子どもたちは、「塩」だった。「塩はおかしい。」という反応が出たのは、とても面白かった。子どもにとって、まず注目するのはどこだろう。クリームが続き、酢、塩。子の並びは、入れ替えると成立しなくなる。クリームは、外からだから。酢は、間違い。塩は、言い訳できない。この素材の並び方は、あり得る。説明できない塩は、敢えて表現していない。「注文」に意識させる。段々との中に、子どもたちの中に読み深まりは、あったと思われる。「注文」という言葉がしかけだった。ただ、点として有力な意見を言う子が繋いでいったので、みんなのものになるために、重要だと思うなら時間をかけるべきだった。「2枚目の扉に書いてあった『注文』と今の(6枚目裏)『注文』の違いは何だろう。」とみんなで共有できればいい。

・まとめ

「今度という今度は、」という表現に着眼することは、「みんなはどこで気づいた？」につながっている。読み手は、もう既に気づいているということを表す。作者がかなり意識して使っている。重要な表現。

子どもたちは、物語のしかけに気づきながら、それを言葉にのせながら、自分たちが読んできたことを、面白く相対化していった。

グループで、各扉を担当したことで、担当した扉の主体性をどう活かすかが課題。グループとして考えてほしいこと。専任を持つことで、全体の読みが深まるようにつながる。

これからの箕面市の課題。前から順番に寸断して細かく読み取っていくのではなくて、今日の部分が他の部分とどうつながるか。子どもたちの視野が「次」に行ったのは、すごくよかった。「次」につながってよい。前ともつながり、いろんな所とつながりながら、今日の部分をわかっていく。

最初と最後だけを読んで、どんな話か想像してみたり、扉の順番を替えてみたり、扉ごとに担当してそれぞれが、分析したことを交流して、全体の扉を大きく把握したり、全体構造をいかに早くつかませるか。意識してつくっていく授業を模索していくことが必要。特に5,6年生。できるだけ短時間で、つかませる。押さえるべき所を、押さえる。酒井教諭の昨年度「世界一美しいぼくの村」のコンセプトや、今年度1年生の授業でもあった「部分を見ながら、全体を意識する」授業づくりを

してきた。

本授業では、その集大成として、高学年として「作者を意識して読む」ことができた。他の部分とつなぎながら意味づけることができた。表現の仕組みを前と比べながら読めた。初発の感想で登場人物に同化していた子どもたちが、そうではない読み方に昇華できた。違う読み方を自覚することができる子どもたちになれた。とても収穫の多い授業だった。

おわりに

発達段階に応じた読解力を育成していくためには、どのような教育課程が必要か。ある程度、小学校の教材開発が中心になされてきた。今後、小中一貫教育の視野も含めた原点も掘り起こしながら、学校種を越えた小・中学校の教材分析及び授業研究をしていくことで、構造モデルを具現化する「授業づくり」にこだわっていきたい。子どもに力をつける授業実践力向上についての研究を深める必要があると考えられる。

国語科学習指導案

指導者 上野 詩織

1. 日時 2010年6月29日(火) 第5限
2. 学年・組 3年1組(男子19名、女子13名 計32名)
3. 単元名 「きつつきの商売」(光村図書出版)
4. 単元目標
 - ・構成や表現の工夫に着目し、内容を読み取る。
 - ・情景や登場人物の気持ちを想像しながら読む。
 - ・自分の考えや想像したことをまとめ、ワークシートに書く。
 - ・叙述から理由を明確にして話し合う。
5. 教材について

本教材は、森の中できこえる「音」を軸に登場人物が交流する物語で、自然の美しさがよく表れている作品である。目には見えない「音」を売る店を開いたきつつきと、その店にやってきた野うさぎや野ねずみたちとの交流を描きながら、自然の中の静や動、美しさ、豊かさを表現している。

物語は二つの場面で構成され、時間の経過に沿って登場人物の会話を中心に分かりやすく展開されていく。[1]の場面では、きつつきが開店した「おとや」へのお客として真っ先に野うさぎが登場し、「四分音符分のぶなの音」を注文する。それに対し[2]の場面では、雨の中で12ひきの野ねずみの家族が「新しいメニューの音」を聞くという設定になっている。そこで、物語の表現のしくみとして、二つの場面を次のような観点で対比させながら、子どもたちの読みを深めていきたい。①お客 ②注文した音 ③音の出し方 ④音の長さ ⑤音の聞き方 ⑥音を聞くお客の様子 である。これらの対比をすることで、作者が意図した表現のしくみを知り、その効果を考えさせたい。また、[2]の場面では、野ねずみの家族がきく音が次のように変化していくことにも気づかせたい。まず、身近にあるぶなの葉に落ちる雨の音から始まり、森の奥深くに落ちる雨の音、森全体に響く雨の音、というように音が広がっていく表現方法を用いている。これらに着目させることは、子どもたちが日常の中できく音を再発見させることにもつながり、さらには、自らの表現活動(日記、作文、報告文など)にも発展させていけるのではないかと考える。

《自らの表現に活かすために》

- 物語を読み終えた後、「もし自分が森にいたら、『おとや』へ何を注文するか」を考えさせる。「外院の森」への探検も思い出させながら、本教材で学習した内容と結びつけ、自然の中の音に対してイメージを広げさせる。

6. 指導計画 (全7時間)

次	時	児童の学習活動	指導上の留意点・支援
一次	1	<ul style="list-style-type: none"> ・森の写真を見て想像したことを書き、発表する。 ・題名をもとに内容を想像し、きつつきが開いたお店について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの経験や知識を思い出させる。(キャンプ、外院の森など) ・一文ずつ子どもに提示し、叙述や話し合いをもとに考えさせる。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・野うさぎの様子を読み取り、一番に野うさぎが来た理由を考える。 ・「おとや」のメニューを作る。 ・野うさぎの注文内容を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・叙述や挿絵から野うさぎの様子をとらえさせ、作者が野うさぎを最初のお客に設定した理由と結びつけさせる。 ・森の中の様子を思い出させ、自由にメニューを作らせる。 ・四分音ぶの長さを確認させる。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ・注文を受けてからのきつつきと野うさぎの様子を読み取り、気持ちを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・叙述をもとに音を聞く二人の様子を読み取り、気持ちを考えさせる。
二次	1	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物や場面の設定について、〔1〕と対比しながら読み取る。 ・会話文から、野ねずみの家族が「おとや」に来た理由を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・天気やお客の数、メニューなど、〔1〕の場面と異なる設定を読み取らせる。 ・雨が降ったことで、野ねずみの家族が今日やっと、「おとや」に来ることができたという場面設定を確認させる。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・「おとや」のとくべつメニューを聞く前の、野ねずみの家族ときつつきの様子を読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・とくべつメニューに期待している野ねずみの家族と、いい音を聞かせたいきつつきの様子を読み取らせる。
	3 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・雨の日のとくべつメニューの音を聞く野ねずみたちの様子を読み取る。 ・音について〔1〕と比べる。 ・「おとや」で何を注文したいか、自分の考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作者の表現のくふうを意識させ、根拠となる叙述に注意しながら読み取らせる。 ・表現のしくみによる話の広がりを意識させる。 ・注文の理由をはっきりさせる。
三次	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「おとや」で何を注文したいか、その内容と理由を交流し合う。 ・作者の他の作品を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの良さを認めながら、発表を聞くことができるよう支援する。 ・「きつつきの商売」の原典である「森のお店屋さん」

7. 本時の目標

- ・作者の表現のしぐみに着目し、野ねずみたちの様子を読み取る。
- ・作品の良さを味わいながら、「おとや」を通してお互いの思いを交流する。

8. 本時の展開

児童の活動	指導上の留意点	備考
1. 前時までの学習をふりかえる。	○会話文に注意しながら個別に表現読みさせる。 ・前時をふりかえらせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">雨の日の、とくべつメニューの音をきこう</div>		
2. 本時のめあてを確認し、2場面後半を音読する。	○導入で出し合った森のイメージや、野ねずみたちの様子を確認し、表現に生かせるよう支援する。	森の写真
3. 野ねずみたちがきいた、いろいろな森の音について考える	○近くできこえる音や、森の奥深くからきこえる音を想像させる。	
4. 【1】場面との「音」についての違いを比べる。	○作者の表現のしぐみによる話の広がりを意識させる。 ・音の数 聞こえた音の長さ 何の音かを確認させる。	
5. 雨の音をきいている、野ねずみたちの様子を読み取る。	○根拠となる叙述に注意させ、雨の音を楽しんできいている様子を読み取らせる。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">あなたは「おとや」で何の音を注文したいですか</div>		
6. 「おとや」で何を注文してみたいか、自分の考えをまとめる。	○今までの学習ノートや外院の森たんけんを振り返りながら、考えるよう支援する。 ・注文の「理由」を、はっきりさせる。	
7. 自分の「注文内容」、「理由」を交流する。	○お互いの良さを認めながら、発表を聞くことができるよう支援する。	

国語科学習指導案

指導者 箕面市立北小学校 関野真弓

1. 日時 平成 23 年 (2011 年) 2 月 1 日 (火) 第 2 限

2. 学年・組 第五学年い組 39 名

3. 単元名 表現のおもしろさを考えよう

4. 教材名 「注文の多い料理店」(東京書籍五年下)

5. 単元目標

- ① 表現のおもしろさや工夫に気づき、登場人物の心情の変化を読み取る。
- ② 自分なりの考えや思いを書いたり、友だちと意見を交流したりしながら、考えを深める。
- ③ 学習したことを活かし宮澤賢治の本を読み広げ、ブックカバーにまとめる。

6. 教材観

「注文の多い料理店」はものすごい山奥にある西洋料理店を舞台にして、何事も自分たちに都合よく解釈する自己中心的な二人の紳士が、山猫の巧妙なしかけにより、自分たちの身につけている衣服や武器など、いわゆる「文明」を一つひとつはぎ取られていく物語である。徐々に山猫のわなにはまり、紳士たちの命がねらわれていく物語の展開は不気味でありながらもテンポがよく、紳士や山猫の言動はどこか滑稽に感じられる。

また、生き物の命を平然と奪う傲慢な態度の紳士たちが最後に山猫から顔への刻印という形で痛烈なしっぺ返しを食らうということから、同じ生き物であることを忘れて文明におごる人間への警告を発している物語である。

テンポの良いストーリー展開で、不気味さと同時にユーモラスさを感じさせるこの物語は、子どもたちをぐいぐいと作品世界の中に引き込むであろう。

【構成について】

この作品は「起承転結」の四段構成であり、「起・結」を同じ現実的な設定で描き、「承・転」は非現実的な世界として描かれている。これまでに学習してきた物語は、冒頭（起）と結末（結）はつながりがあり、主となる登場人物はある出来事を通して（承・転）、内面が変わったり、取り巻く世界が変わったりするという話が多かった。この「注文の多い料理店」も紳士たちが不気味で恐ろしい出来事を体験するという「承・転」をはさんで冒頭と結末部分には深いつながりがあるが、紳士たちの内面は変わっていないという子どもたちにとっては初めてのタイプの物語である。

この物語がテンポよく、不気味でありながらもどこかユーモラスさを感じさせるひとつのしかけとして七枚の「戸」と「注文」があり、作品全体を貫く重要な構造であると考えられる。「戸」に書かれたそれぞれの注文には、ひとつの言葉でも二通りの読み取りができ、そこに紳士と山猫の思惑にずれが生じてくる。山猫が次々と打ち出してくる「戸」の注文と、それに対する紳士たちの反応のおもしろさに引き付けられ、「次はいったいどうなるのだろう」と子ども達が意欲的に読み進めることができるテンポのよいストーリー展開になっている。山猫が紳士たちをだますしかけであると同時に、初読では紳士たちと同じ思いで読み進む読み手が、再読では山猫の意図を見抜き紳士たちの言動を滑稽に感じながら読めるような作者のしかけである。このように二重の意味で捉えられ、初読では気づかなかったが、再読するとうこういうことだったのかと思えるようなしかけが他にもたくさんあり、物語をより面白く感じさせている。

また、その「戸」に書かれている注文は順序性があり、紳士たちを安心させたり、いらないものを取り去らせたり、味付けをしたり、実に巧妙である。「戸」の表と裏に書かれている注文を比較すると裏の注文は山猫の本音がうかがえる。つまりこの七枚の「戸」が物語の世界にいざなう重要なしかけであると考えられる。

【表現上の特徴・特性について】

・題名

「注文の多い料理店」という題名は「客からの注文が多くて人気のある店」「メニューの多い店」「どんな店なんだろう」と先が読みたくなり、この物語に興味・関心を抱かせる。また、この題名そのものが「戸」と同じように「客からの注文の多い店」と「客への注文の多い店」の二重の意味にとれるしかけであることがわかる。

・ファンタジー

ファンタジーとは、現実とも非現実とも思える世界である。現実ではありえないことでも、細やかな描写を積み上げていくことで、読み手は作品の中に入っていくことができる。たとえば紳士達が迷い込んだ「山奥」は「だいぶの山おく」「案内の鉄ぼううちもちよつとまごついてどこかへいってしまったくらいの山おく」なので「白くまのような犬が二ひきいっしょにめまいを起こして、しばらくうなづいて、それからあわをはいて死んでしまいました。」ことも不思議でないと思われる。そのファンタジーの入り口と出口が「風」であることも、特徴的である。

・効果的な色使い・ものの描写

「げんかんは白い瀬戸のれんが」「ガラスの開き戸がたって、そこに金文字で」等西洋料理店の様子やそばに置かれたもの、特徴的な色彩が書かれている。これらは紳士たちの関心をひき、山猫が紳士達をわなにはめていく一つのしかけとして描かれている。

・声喩

「風がどおとふいてきて草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。」等この物語は声喩が多く使われており、物語が不気味さを増し物語が動き出すと同時にその時の人物の思いが更に良くわかる。他にも「くつをぬいでペタペタ歩いて」や「こう水を頭へパチャパチャふりかけました。」等では紳士たちの様子がよりイメージ豊かに感じられる。

7. 児童観

本学年は単学級で男子19人、女子20人、計39人のクラスである。人数が多いにも関わらず男女仲、クラス仲はよく、何をするにもまとまって行動できる子どもたちである。素直で明るく何事にも真面目に取り組み、任せられた仕事は責任を持って行える。

しかし、以前から失敗をしないように他の人の行動に自分を合わせがちな子が多いように感じていたが、最近になり高学年特有の小集団における仲間意識が強くなり、仲の良い子がやっている言動には深く考えずに同意してしまう、またはおかしいと感じていても意見を言えずに同意してしまう問題が生じてきた。

そこでこの問題以降「自分で考えること、判断すること」を指導し続けてきた。今学期は6年生に向かう子どもたちに、自分の視点だけでなく必ず向こう側（反対）の視点があることを考える力、何が正しいのか自分で判断し行動する力をつけていきたいと考えている。

「注文の多い料理店」の学習を通してそのようなものの見方考え方を身につけさせたい。

8. 指導について

本作品を読み進めていく上で題、冒頭場面、7枚の「戸」の関係、「戸」に書かれた注文、繰り返される紳士達の人物像、声喩を含めた情景描写、結末場面にある最後の一文に着目させていきたい。

主体的に読む力を育てるために、初発の感想を書くときに「みんなで話し合いたいこと」「読みを深めたいところ」「わからないところ」を大切にし、自らの課題とするとともに、全体の学習課題とする。さらに音読を重ねながら本文に書かれている言葉や文章から思ったこと・わかることの書きこみをする。特に本単元のめあてである作者の表現上の工夫がわかるところにも着目して書き込みをさせたい。

冒頭の部分では紳士達の行動や会話から紳士達の人物像をしっかりつかませ、結末部分での紳士達が変わったかどうか考えさせる伏線としたい。この作品は「戸」そのものが重要な作品の構造であることから、「戸」に書かれている注文の意味や「戸」の順序・関係など「戸」の秘密をさぐりながら、紳士達の人物像や心情を読み取っていく。そして題名、構造、人物像などから最後の一文の意味を考え、子ども達一人ひとりがこの作品を通して感じたことや思ったことを大切に、読み手がとらえた主題にせまっていきたい。そのことが日常生活を振り返る機会となると思われる。

表現のしくみに着目して内容の読み取りをさせた後に、まとめの段階でもう一度効果的な色使い、声喩、情景描写、ファンタジーの構造などが、物語のしかけであることに気づかせ、この作品をかいた宮澤賢治がなぜそのようなしかけをしたのか、その表現に作者のどのような思いが込められているのかといったことを考えさせたい。そしてこれまで学習したことがらを活かして宮澤賢治の他の作品を読み、ブックカバーをつくることを通して自分の読みを自分の表現でまとめ、交流させていきたい。

一人ひとりの学習課題をまとめ、クラス全体の課題とし解決できるように全体の場での話し合いを大切にしていきたい。そのためにも、まず友だちの考えをしっかり聞き、相手を認めることを意識づけたい。その上で、自分の考えをしっかり持ち、自分の言葉で書くことによって考えを整理し、他者に伝えるようにする。個人的な読み取りを他者に分かってもらうためにも物語の表現・言葉が根拠となると考える。他者の考えから学んだことを振り返ることによって、更に自分の考えを深め、練り上げることができるようになる。

9. 単元の評価規準

国語に対する関心・意欲・態度	①場面の展開や人物の心情について、自分なりの考えを持って読み深めようとしている。 ②物語の構造や表現に着目した読み方を他の作品へと読み広げようとしている。
話す・聞く能力	①自分の考えや意図が分かるように、話の組み立てを工夫して話している。 ②話し手の意図を考えながら話の内容を聞き、交流している。
書く能力	①人物の心情・表現の工夫・主題について、自分の考えを明確に表現している。 ②文学教材を読み広げ、自分の読みをまとめて書いている。
読む能力	①登場人物の心情・考え方や、作品のしくみ・表現の工夫を読み取り、作品の主題について考えている。 ②学習を活かし、主体的に他の作品を読み進めている。
言葉に関する知識・理解・技能	①文や文章のいろいろな構成があることについて理解している。 ②表現したり理解したりするために必要な語句について、辞書を利用して調べている。

10. 単元の指導計画（全16時間）

第1次 学習の見通しを持つ（2時間）

- ・ 冒頭と結末からどんな物語かを想像し発表する。（1）
全文を通読し初発の感想と学習課題を書き、交流する。
- ・ クラス全体で話し合いたい学習課題を設定する。（1）
場面分けをする。
表現の工夫を見つけながら、思ったことやわかったこと、考えたことを書きこむ。
(宿題)

第2次 表現の工夫や二人の紳士の心情の変化について考え、自分なりの主題をつかむ（11時間）

- ・ 二場面の様子や会話から二人の紳士の人物像や関係をとらえる。（1）
- ・ 7枚の「戸」に書かれた注文を整理し、グループごとに「戸」の分析をする。（3）
- ・ 1, 2枚目の「戸」の言葉と紳士達の会話から二人の紳士たちの心情と繰り返される人物像を読み取る。（1）

- ・ 3, 4枚目の「戸」の言葉と紳士達の会話から二人の紳士たちの心情と繰り返される人物像を読み取る。(1)
- ・ 5, 6枚目(表)の「戸」の言葉と紳士達の会話から二人の紳士たちの心情と繰り返される人物像を読み取る。(1)
- ・ 6枚目の裏側の場面(四場面)から、これまでとは違う二人の紳士たちの様子を読み取り、作者の工夫に気づく。(1)《本時》
- ・ 7枚目の「戸」の言葉や、「戸」の内側の会話から、ただ泣くことしかできない二人の紳士の心情を読み取る。(1)
- ・ 二人の紳士達の変化を考え、最後の一文にこめられた作者の思いを自分なりにとらえて、考えを交流する。(1)
- ・ 主題について考え、自分の生活する世界や自分自身と作品を比べてふり返り、交流する。(1)

第3次 これまでに学習したことを活かして宮澤賢治の他の作品を読み広げる。

(3時間)

- ・「注文の多い料理店」を読んでおもしろいと感じた表現や工夫を見つけ、交流する。(1)
- ・「注文の多い料理店」との共通点を見つけながら、宮澤賢治の他の作品を読む。(1)
- ・他の作品のあらすじや主題・心に残ったことなどをまとめブックカバーをつくり、紹介し合う。(1)

11. 本時の展開 (第2次7時)

①本時の目標

二人の紳士と読み手の認識のずれを意味づけることを通して、作者の工夫をとらえることができる。

②本時の展開

学習活動	指導上の留意点・支援	主な評価
1. 6枚目の「戸」の裏側の場面を読み、二人の紳士の会話と行動から、今までの紳士達とこの場面での紳士達のちがいを読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・本文に書き込みをするよう声かけをする。 ・どこの言葉や文からそう考えるか明らかにさせる。 ・「今度という今度は」「ぼくもおかしいと思う」などの言葉に目をむけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題をつかみ、見通しを持っている。(関) ・場面の様子や会話から考えている。(読)

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 80%;"> <p>なぜ、この言葉で紳士達は本当のことが分かったのだろうか。</p> </div>		
<p>2. 読み手である自分はどこで二人の紳士達がだまされているとわかったのかふり返る。</p> <p>3. 作者の表現の工夫を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの「戸」の注文と違うところを見つける。 ・これまでの「注文」を掲示する。 ・なぜ自分はこの言葉で分かったのか根拠を明らかにさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの注文と対比して考えている。(読) ・自分の考えを根拠を明らかにして書く。(書)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 80%;"> <p>紳士達と読み手である自分達では、だまされていると分かるところが違うのはなぜだろう。</p> </div>		
	<ul style="list-style-type: none"> ・一つの言葉でも二通りの意味にとらえられる注文のしかけを振り返る。 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 80%;"> <p>どうして作者はこのように登場人物と、読み手の分かるところをずらしたのだろうか。</p> </div>		
<p>4. 感想を書いて交流する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・考えをペアで交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いたりして理解を深めようとしている。(話す・聞く、読) ・今日の学習で分かったことや、他の人の考えを聞いて思ったことを書く(書)